

娘夫婦の招待旅行

野口幹夫



河口湖の紅葉を見に行こうと娘夫婦が招待してくれた。ありがたく受けてすべてお任せで車に乗った。すべてお任せの旅は初めてだが、あまりの受け身で何も調べなかったことに気が付き、前日に にかわ勉強で河口湖のことを調べた。

河口湖は富士五湖のうちで一番標高が低く（とはいえ標高 830m）河口湖だけが外に流れ出す川を持っていないそうだ。流水口をもたないのは、イスラエルの死海と同じだが、死海の水面は海面より低いので出口がなくて当然だが、河口湖はそうはいかない。やはり富士に

降る雨が多ければ氾濫する。周りが山に囲まれているので水は吐けない。そこでこの村民が長 3.8 キロメートルを測る日本最長の手掘りトンネルといわれる新倉掘抜を穿って放水口としたそうだ。江戸時代の隧道川は今は閉鎖され新しい取水口が設置されて、桂川を経て相模川に流れ込んでいる。

河口湖が紅葉の名所とは知らなかった。「紅葉回廊」「紅葉トンネル」と次々に紅葉の名所が河口湖畔に連なっている。「紅葉祭り」がおこなわれていた紅葉回廊にまず案内された。屋台も出てにぎやかだ。河口湖に注ぎこむ名もない運河の兩岸に紅葉や銀杏の黄色で空を覆いつくし、地には人の波で埋まっていた。この「紅葉回廊」の楓の巨木に驚いた、何の説明板もないが、おそらく樹齢 300 年以上だ。狭い運河に水は少なく紅葉の絨毯になっている。運河の兩岸は古い石堤でつくられていたのでそ



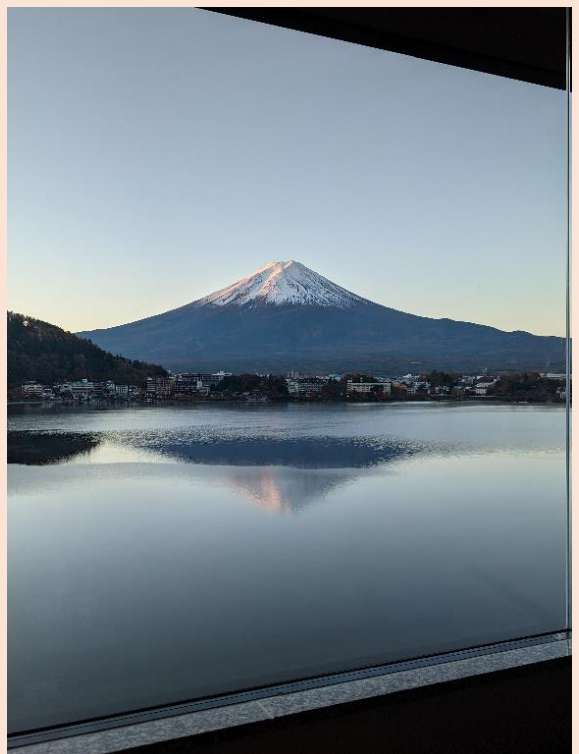
れなりの公共工事でその岸を固めるために楓を植えたのだろう。これも武田信玄？と勝手な想像をした。ここも甲州の地、甲府盆地が 3 つの川の氾濫時、水に沈んだ湖のようになったのを、強大な政治力で治水を行い、実り豊かな農地とした信玄なら、あるいはその家来衆ならこれをやったかもしれないと勝手な想像をした。

その信玄公と意外なところで出会った。ほうとう料理店「歩成」である。昼食事にと連

れていかれたこのお店は、全体が富士に向かった緩やかに傾斜した廊下の両側に食席が並んでいるという特殊な形をしていて、その頂上が富士と信玄公が鎮座しているのである。やはりここでも信玄公の人気は絶大なのだ。



この「ほうとう」というのは、甲府のうどんでは不揃いの太いうどんで、カボチャや野菜や肉と土鍋に煮込んだものだ。「歩成」はご当地コンクールで NO.1 だそうだ。いったときはすでに 30 人待ちで 20 分位駐車場で待つと、やがてスマホに呼び出しが来る仕組みになっている。我々夫婦なら絶対にこんな店には来ない。5 人並んでいたら、あきらめてほかの店に行くだろう。ところが今の現役世代の価値観は違うのだ。こんなに待ってこそ叶えるという人気イベントを楽しむのである。そういえば我が家の近くのワッフル店は週 1-2 回しか店を開かないが、その日は何事ぞと思うほどの行列ができる。馬鹿だな、たかがワッフルや食パンではないかと思うが、並んでいる人たちはそれを貴重な時間と考えているのだと、自分もそれに巻き込まれてやっと理解できた。確かにそのほうとう鍋はうまかったが。



さて宿泊は河口湖畔に建っている「うぶや」とい

う変わった名前の一流ホテルだった。部屋のおおきな窓から富士がでんと座っている。逆さ富士が楽しめますと聞いていたがまさにその通りだった。いつも湘南海岸から眺める富士とは違う。宝永山が奥に隠れているので左右対称だ。頂上からの山崩れ崩壊跡が生々しい、付帯噴火のポコポコした小噴火火口がつながって見える。

泊まった翌朝が楽しみであった。頂上だけが日の出の光を浴びて輝く「赤富士」が刻々見えるはずだ。果たして日の出前の6時23分それが始まった。しかしリアルなので感じが違う。

湘南海岸から見える「赤富士」はマクロだからもっと赤富士らしく見える。



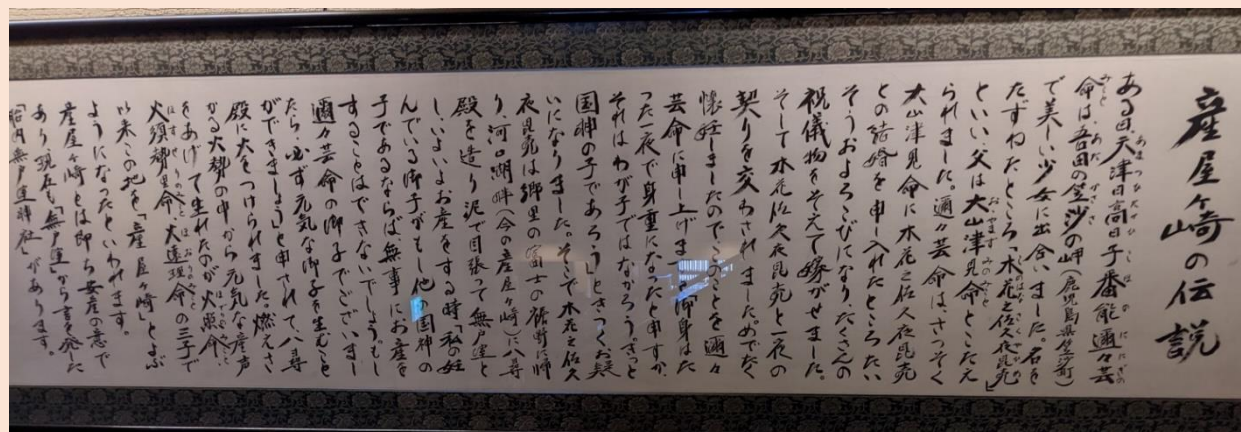
←は湘南海岸から撮った「赤富士」



さて旅館の名前の「うぶや」は、漢字では産屋となり変わった名前だ。由来書があって驚いた。この地の名前が産屋埼で、木花咲耶姫（コノハナサクヤヒメ）伝説の地なのだ。

絶世の美女 木花咲耶姫は 天孫降臨した瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）に九州海岸で一目惚れされ一夜の契りで子供をさづかった。しかし瓊瓊杵尊はそれを怪しんだので、彼女は生まれ故郷に戻り、産屋に火を放ちながら3人の子供を産んだ。火照命・火須勢理命・火遠理命であり、火遠理命の孫が初代天皇の神武天皇である。確かにこのホテルのそばに産屋が埼 産屋が埼神社がある。富士山を神体山としている富士山本宮浅間大社の祭神は、富士山だと思っていたが、実は主祭神は木花之佐久夜毘売命なのだと今回改めて知った。

3年前「日本原記続編」を書くために、九州高千穂など神話の里を巡った。天孫降臨の



高千穂峡から日向に下ってきたとき、ニニギノミコト瓊瓊杵尊の銅像と墓があるのを発見して驚いたが、今回はそのひとめぼれした相手の美女コノハナハクヤヒメの里が、こんなところにあったとは、神話ながらやけにリアルに感じてしまう。「うぶや」に飾ったあった伝説記である。

いろいろの発見のあった楽しい旅であったが、すべて娘夫婦が企画計画手配してくれた旅であった。「老いては子に従え」の通りにした新たな人生の楽しみであった。